

コミンテルンの情報組織と 1930 年代の上海：

ゾルゲと尾崎秀実を中心に

中 生 勝 美

キーワード： 諜報機関、上海、ゾルゲ、尾崎秀実、フランクフルト学派、コミンテルン

1 はじめに

21 世紀に入り、驚異的な速度で発展する上海は、アジアの大都市として戦前の地位を取り戻しつつある。人・物・金の動きは、必然的に情報の動きを増大させる。解放前の上海は、その人・物・金・情報の多さと比例するかのように、「魔都上海」のイメージが強く印象付けられている。その一方で、上海が租界という治外法権の下に作られた植民都市であり、日本人にとって、イギリス租界・フランス租界でヨーロッパへの憧れを代替する存在として定着した。「魔都上海」のイメージは、解放前の上海がもつ国際性と表裏一体をなすもので、世界情勢を敏感に感じ取り、中国と世界を結びつける情報が集積する場としても重要な役割を果たしていた。

1930 年代の上海は、国際情勢の情報を求めて、世界各国からさまざまな人々がひしめいていた。拙稿で扱うゾルゲは、1930 年代初めにコミンテルンから上海へ派遣され、朝日新聞社の尾崎秀実と知り合い、ソビエト、および中国共産党のための情報網を作った人物である。ゾルゲは、その後東京に渡り、日本の情報を収集していた。彼らは 1941 年に逮捕された。日本の司法省は、この事件を 1942 年に「国際諜報団事件」として公表し、国防保安法・治安維持法・軍機保護法各違反等の罪名で予審請求の手続きをとり、ゾルゲと尾崎は 1944 年に死刑となった。ゾルゲは、ナチ・ドイツの新聞記者という名目で東京に赴任し、日本軍の状況、日本軍がソ連を侵攻する可能性、ナチスの軍事作戦の動向などをモスクワに打電していた。尾崎秀実は近衛内閣のブレーン集団である昭和研究会の中国問題専門家として重要な役割を果たし、近衛首相の動静が、すぐさまゾルゲに伝わる情報網を作り上げていた。ゾルゲと尾崎は、1930 年前後に上海に赴任しており、ゾルゲの東京の情報網は、上海の人脈で築かれていた。

しかし、「ゾルゲ事件」は、戦前の対日スパイ事件として歴史の一駒となっているだけではない。戦後の GHQ 情報機関も、ゾルゲ事件がコミンテルンの上海支部と関係し、アメリカ共産党に関する情報があることに関心を持ち、日本の裁判資料、取調べに当たった

検察官への聞き取りをしていた。ゾルゲ事件に深い関心を抱いたチャールズ・ウイロビー少将は、アメリカでの非米活動調査委員会で「リチャード・ゾルゲの話が東京で始まり、東京で終わったものではなく、ソ連の戦略というモザイクの単なる一片でしかないと直ぐ認識したことです」と証言し、日本当局が1930年代初頭の上海コミンテルン組織を捜査した資料に加え、上海租界警察や仏英部の調査書類からアメリカ共産党の活動家がいかに上海で活動していたかの情報を得ようとしていた（白井編 2007：82）。

さらに1960年代になっても、海外の情報機関はゾルゲ事件に関心を示していた。これについて、警察庁長官から衆議院議員となった後藤田正晴が興味深い回想をしている。後藤田が警視庁次官であった1966年に、海外の情報機関の視察へ行き、イギリスのMI5とMI6を訪問した。訪問前の連絡で、イギリスの訪問先からからゾルゲ事件の資料がほしいと要望された。そこで後藤田は古本屋から日本語の資料を入手して持参し、ゾルゲ事件を調べている専門官に事件の概要を説明した。そして後藤田は、どうして第二次世界大戦最中のことを調べるのか聞くと、彼は上海にまだゾルゲの情報網が残っているので、それを調べていると答えた（後藤 1998：231）。

後藤田の回顧録には、それ以上の詳しい内容は書かれていない。しかし、イギリスの情報機関であるので、モスクワ経由で上海の情報が漏れているところから、ゾルゲ事件に着目したのだと思われる。それは、「魔都上海」と呼ばれた1930年代の上海の混沌とした状況が、新中国成立後も、コミンテルンの細胞としてソ連の情報組織が上海で暗躍していたことを意味する。

ゾルゲ事件は、ロシアの情報網が、深く日本国内に入り込んで情報工作を行っていたことを示している。戦後のアメリカでも、マッカーシズムによる反共宣伝の一環として、アメリカ国内の共産主義シンパを攻撃するためにゾルゲ事件を利用した。さらに「ゾルゲ事件」は、国際スパイ、共産党、コミンテルンというテーマで、日本・アメリカ・ロシア・ドイツ・フランスで、国際政治の研究だけでなく、近年小説や映画にもなり、注目を集めている¹。しかしゾルゲが情報収集した中国では、スパイ事件として紹介したアメリカとロシアの書籍の翻訳しか出版されていない（F・W・狄金、G・R・ス多利 1983、尤里・科羅利科夫 1980）。

本稿では、ゾルゲ事件の全体像を紹介した上で、1930年前後にゾルゲと尾崎が「魔都上海」で築いた人間模様と、その情報網について分析することで、上海の混沌とした状況と近代知識人の国際性について考察を加えたい。

2 ゾルゲ事件

リヒャルト・ゾルゲ（Richard Sorge 1895-1944）は、ドイツ人の父とロシア人の母の間に生まれた²。父は石油技師として現アゼルバイジャン共和国バクーで働いていた。3才のとき家族とともにドイツに転居し、少青年期をベルリンで過ごした。志願兵として第一次世界大戦に参戦した。その後1919年に賃金政策に関する学位論文によりハンプル

ク大学から政治学博士号をとった。彼はハンプルクで社会主義学生団を組織して、その書記長になった。同年ドイツ共産党に加入し、活動家となった。1922年にドイツのチューリングゲン州イルメナウで開催された「第一回マルクス主義研究週間」に参加した³。1924年にモスクワに移り、コミンテルン活動に従事をする。1928年にゾルゲはゾンター（R. Sonter）のペンネームでマルクス主義的経済分析の雑誌『新ドイツ帝国主義』を刊行した。

出典：石堂清倫編『ゾルゲ事件資料』（現代史資料1）東京：みすず書房、1962年、30ページ。

ゾルゲの情報網として重要な役割を果たした尾崎秀実は、中国問題専門家として近衛内閣のブレーン集団、昭和研究会の主要メンバーとなった。ゾルゲは日本の政治・社会・文化の研究に精力を注ぎ、やがて、日本通としてドイツ大使の私設情報担当になり、ドイツ大使館で日本情報を分析する相談役になった。その間、尾崎とも緊密な連携をとり、ドイツが持つ日本の政治・外交・軍事に関する情報を入手し、暗号を使ってソ連へ情報を送り続けた。

尾崎秀実とゾルゲは1930年から1932年まで上海に滞在し交際があった。ゾルゲの供述・手記をもとにつくられた宮城裁判長の判決文によると、二人を上海で最初に引き合わせたのは、米国人ジャーナリスト、アグネス・スメドレーということになっている。しかし加藤哲郎の分析によると、米国共産党の日本人「鬼頭銀一」^{きとうぎんいち}であるという。彼の名は尾崎秀実の当初の供述に何度も出てくる人物であったが、裁判で、ゾルゲが鬼頭銀一の関与を強硬に否定したために、尾崎も途中で供述を変更させられ、最初の紹介者はスメドレーということになった。

司法省の発表によると、「本諜報団はコミンテルン本部より赤色諜報組織を確立すべき旨の指令を受け昭和八年秋我国に派遣せられたるリヒャルト・ゾルゲが、当時既にコミンテルンより同様の指令を受け来朝策動中なりしブランコ・ド・ヴーケリッチ等を糾合結成し爾後順次宮城与徳、尾崎秀実、マックス・クラウゼン等をその中心分子に獲得加入せしめ、その機構を強化確立したる内外人共産主義者より成る秘密諜報団体にして十数名の内外人を使用し結成以来検挙に至るまで長年月に亘り、合法を擬装し巧妙なる手段により、我国情に関する秘密事項を含む多数の情報を入手し、通信連絡その他の方法によりこれを提報しいたるもの」と説明した。これがゾルゲ事件について公表された最初のものであった。被検挙者の中に当時著名なジャーナリスト・中国問題の専門研究者であり近衛文麿の側近の一人であった尾崎秀実、衆議院議員4回当選・総理大臣秘書官・汪政府顧問等の経歴をもつ犬養健、外務省および内閣嘱託の西園寺公一、「盟邦」ドイツの大使館内に重要な地位をえていた外務省の職員がふくまれていたことから、この事件の発表は日本国内に大きな衝撃を与えた（法政大学大原社会問題研究所編 1965）。

3 尾崎秀実

尾崎秀実は1901年に東京で生まれ、ジャーナリストの父とともに、幼少年期を台湾で過ごした。植民地台湾での経験は、抑圧された台湾人への同情となり、その後の尾崎の民族問題・中国問題に目を向けるきっかけとなった（風間 1976：80）。一高から1922年に東京帝国大学法学部に入学し、友人の影響で社会主義思想に惹かれるようになった。1年間大学院に残って、労働法を研究するという名目で、実際は社会主義関係の本を読んでいた。彼は1926年に朝日新聞社に就職した。彼が社会部にいた時には、足尾銅山の監獄部屋に潜入して、最下層の労働者を取材していた（風間 1976：87）。

彼は1928年11月から上海支局に勤務した。上海では魯迅をはじめ中国の進歩的な知識人たちと交際して中国の文化運動に参加し、東亜同文書院の学生を中心とする「日支闘争同盟」など共産主義運動から反戦活動をしていた日本人、および中国人運動家と接触を持った。1930年10月ごろ、アグネス・スメドレーを通じてゾルゲと情報交換をした。尾崎は1932年に帰国して大阪本社に勤務するが、1933年9月にゾルゲが来日し、1934年5月に尾崎はゾルゲと再会した。同年9月に、尾崎は東京朝日新聞社東亜問題調査会へ転勤となり、本格的にゾルゲへ日本情報を提供するようになった。

尾崎は、ジャーナリストとしても、中国問題の専門家としても高い評価を得ていた。特に1936年の西安事件で、蒋介石が軟禁された時に、彼が容共策に転換することを条件に蒋介石が南京へ無事戻れることを断言した。その根拠として、中国共産党の主要な敵は蒋介石でなく日本帝国主義勢力であるという基本的認識から分析し、予想通りに事件が収拾したので、評論家として評価を高めた（風間 1976：253-254）。

また第一次近衛内閣が発足して、1938年6月には内閣の調査事務に参画し、政治新体制の機構立案を囑託された。当時、第二次近衛内閣で具体化した新体制は、大政翼賛会の組織化であった。内閣囑託として尾崎は、「支那事变処理に関しての意見具申」を担当し、つぎの5項目の意見をまとめた。①支那事变処理、②支那事变処理の方法としての対イギリス工作の可能性の意見、③支那事变遂行の経緯に就いての観測意見、④王精衛工作の意見、⑤国民再組織の私案。この仕事を遂行するため、尾崎は首相官邸内にデスクをもち、秘書官室や書記官長室に自由に入出入りすることを許され、日本政界の上層部に直接接触できる地位となった（風間 1976：272-273）。さらに1939年1月4日に近衛内閣が総辞職をした後、同年6月からは満鉄調査部囑託となり、1940年から始まる「支那抗戦力調査」の企画を通じて、中国での日本軍の動きや対ソ戦に関する情報を収集した。

尾崎がゾルゲに提供したといわれる情報は、かならずしも機密資料といえるものではなく、新聞記者や大使館員が得るような通常の情報に基づいた彼独自の分析が情報源であり、彼の政治判断や分析結果を示唆することで、ゾルゲの活動に協力したのである。尾崎の近衛内閣囑託時代に、ゾルゲが最も関心を寄せた問題は、張鼓峰事件と日独伊の接近である。張鼓峰事件とは、1938年7月に、朝鮮の北端で、ソ連・満州・朝鮮の国境が交差する部分でおきた衝突事件で、日本軍部が戦線の拡大をあきらめざるをえないほどソ連軍の反撃が強大であった。この事件があっても、日本の対ソ政策は変更されず、ドイツとイタリアに防共協定の強化と軍事同盟締結の交渉をおこなった（風間 1976：277-279）。

尾崎とゾルゲの目的は、日本の対ソ戦争の可能性であった。1939年5月に起きたノモンハン事件は、関東軍が第23師団に満州の飛行機と戦車のほとんど全部を結集させて攻勢に出たが、近代装備を持つソ連の機械化部隊の反撃により第23師団の80%に死者を出して敗北した（風間 1976：286）。この大敗で、日本のソ連攻撃の可能性は低くなり、かつ1941年8月には近衛首相が日米首脳会談を計画していたが、最終的に日米交渉が決裂し、アメリカ・イギリス・オランダとの戦争が回避できないとする前提で、10月下旬

を目標に戦争準備を完了していた。この時点で、日本がソ連へ侵攻せず、東南アジアへの「南方」作戦に出ることがわかったので、ゾルゲと尾崎の仕事は、一段落ついて、ゾルゲも日本での仕事を終えて引き揚げようとしていた（風間 1976：306）。

尾崎は、1941年10月15日に検挙され、1943年9月29日に死刑判決が下され、1944年11月7日に死刑が執行された。

4 上海の国際情報組織

1930年代初頭にゾルゲと尾崎が上海で邂逅したことが、彼らの活動の出発点である。では、彼らは、上海でどのような活動を行っていたのであろうか。

ゾルゲは、1930年1月から1932年12月まで上海に滞在した。このとき、ゾルゲは赤軍第4本部から上海に派遣された。ゾルゲはヨーロッパにいたときからスメドレーと面識があり、彼女の紹介で上海の左翼運動協力者を選定した（石堂編 1962a：155-156）。ゾルゲがモスクワで与えられた任務は、次のとおりである（石堂編 1962a：161-162）。

- (1) 南京政府の社会的、政治的分析
- (2) 南京政府の軍事力の研究
- (3) 中国における各派の社会的、政治的分析、ならびにその軍事力
- (4) 南京政府の内政および社会政策の研究
- (5) 各国、特に日本およびソ連に対する南京政府の外交政策の研究
- (6) 南京政府および各派閥に対する、アメリカ、イギリス、日本の政策の研究
- (7) 中国における列国軍事力の研究
- (8) 治外法権および租界問題の研究
- (9) 中国農工業の発達および労働者と農民の状況に関する研究

さらに、モスクワ当局が暗黙に了解し、ゾルゲが個人的に注意を払った問題は、次のとおり。

- (1) ドイツの新しい経済活動（特に増強されていたドイツ軍事顧問団について）
- (2) 中国におけるアメリカの発展状況の観察（特に上海のアメリカ投資）
- (3) 満州に対する日本の新政策とソ連への影響
- (4) 上海事変で日本が意図している目的と日本軍の配備に関する観察
- (5) 南京政府の日本の関係悪化に関する観察

モスクワ本部は、ゾルゲの選んだ研究項目を受け入れたばかりか、これについて満足の意を表した。

ゾルゲの上海での情報活動は、南京政府、つまり国民党を対象にしたものであった。そこで興味深いのは、モスクワから中国共産党とは直接接触しないように厳しく命令されていたことである。ゾルゲは、情報を収集するためコミンテルンから離れ、ソビエト共産党と赤軍第4軍本部のために働くようになってから、他国の共産党と関係することを禁じ

られていた。中国共産党に関する情報収集は、ゾルゲとは別のコミンテルンのグループが担当していた。さらにゾルゲは、日本共産党とも接触を持つてはならぬという命令も受けていた（石堂編 1962a：161）。

ゾルゲの南京政府に関する社会、経済的な分析は、基本的に公的な情報を通じて分析した。軍事情報に関しては、ドイツ人の軍事顧問団や武器輸入商から重要な情報を集めた。ゾルゲの個人的な関心で研究したテーマで重要なのは、ドイツの経済活動であった。モスクワ当局は、ゾルゲにドイツの軍事顧問団と親密になるよう勧めていた。ゾルゲは、少数のナチ指導者によって提唱された親日政策がドイツ国内で少数の支持しか受けられず、ドイツの経済界は中国に同情的態度をとるばかりでなく、中国に期待をしていたと指摘していることは重要である。ドイツの活動目的は、中国陸軍の組織を支配することだった。つまり、中国陸軍に軍需物資を供給し、軍事工場網をつくって間接的に国防企業に従事することだった。日本の司法警察に提出したゾルゲの手記で、彼が上海のドイツ人と交際し、正確で重要な情報を入手したと述べているが、具体的な成果は書いていない（石堂編 1962a：162-165）。

社会思想研究家の石堂清倫は、ゾルゲが上海にいたときに、蒋介石グループのドイツ国防軍顧問団ルートで国民党軍の反革命政策と戦略を探知して大きな成果を挙げたと指摘している。その成果を、江西省瑞金の中国ソビエト政府下の解放区に対する中国国民政府軍の包囲殲滅作戦失敗は、ゾルゲの諜報活動が効果を挙げた例だとしている（マードー 1999、石堂 1987：137-138）⁴。

1931年9月18日に起きた満州事変は、日本が極東で果たす役割を大きく変えるものだった。満州は、ハルビンにある別グループが担当していたけれども、ソ連の国防上、ゾルゲは満州事変に関心を払っていた。そしてゾルゲは、1932年の上海事変が偶発的な事件か、あるいは日本が満州獲得に続いて、中国を征服しようとする戦略であるのかが判らなくなったと述べている。満州事変は日本外交が新しい方向に向かうことを示しており、ゾルゲが上海で収集していた情報は、日本軍が「北進」してシベリアに侵攻するのか、あるいは南下して中国に攻め入ろうとするのかを判断する材料であった。ゾルゲは、これらの問題を総合的に分析するため、日本の歴史や外交政策を深く研究しようと考えた（石堂編 1962a：166）。

ゾルゲは、日本の満州政策、それがソ連に及ぼす影響、上海事変、日中の衝突、日本の進出の問題を調べるために、尾崎を単なる情報提供者に留まらず、日本問題の師として仰いだ。尾崎は、満州北部とシベリア国境地帯での日本の計画について報告書を提出し、日本がシベリアを侵略する意図があるかどうかを判断する材料を集めるため、協力者の一人、川合貞吉を満州と華北へ2度派遣して軍事情報をあつめさせた。

ゾルゲが、個人でナチス・ドイツの顧問団に接触して獲得した情報もあった。しかし満州事変や上海事変、それに続く「満州国」の建国は、ソ連の直接的な脅威となった。ゾルゲは日本の大陸政策に対する分析の大部分を尾崎の見解に依存していた。では、尾崎の上

海における活動は、どのようなものだったのだろうか。検事尋問調書第 20 回によると、尾崎の上海での主な活動は、次のものを挙げている（石堂編 1962b : 204）。

- 1、中国の文芸左翼との関係
- 2、東亜同文書院左翼学生グループとの関係
- 3、中共駐滬政治顧問団
- 4、楊柳青との関係
- 5、中国労働通信社上海駐在員某との関係
- 6、ゾルゲ及アグネス・スメドレー等との諜報活動の関係

この中で、中国の「文芸左翼」とは、北四川路附近にある「創造社」で、中国の左翼の知識人である⁵。創造社は郭沫若が始めた左翼文化運動の機関で、中国の文芸左翼と称する人達がそこに集っていて、左翼画家で文筆家でもあつた沈叶を通じて、鄭伯奇、馮乃超、田漢、郁達夫、王独清、成仿吾が主要なメンバーであつた。尾崎は彼らの発行した『大衆文芸』主催の座談会にも招かれて一度出席したほか、白川次郎、欧佐起のペンネームで数編の論文を執筆投稿した。しかし、1929 年春に上海市公安局から弾圧を受けて廃刊となり、同時に創造社も閉鎖を命ぜられたので、仲間が分散して連絡が途切れた（石堂編 1962b : 204-205）。

尾崎は雑誌『戦旗』『国際文化』で創造社を知ったと述べている。『戦旗』は尾崎が上海に渡る半年前の 1928 年 5 月に創刊された。上海時代の尾崎については、丸山昇が公的資料に、具体的な中国左派文化界の動きを整理している。以下は、丸山の分析に依拠しながら、尾崎が影響を受けた創造社の活動を見ていこう。

丸山によると、1927 年 11 月までに当該雑誌に掲載された中国関係の論文・記事は、6 月の 1 巻 2 号に王独清、山口慎一訳「故国よ。私は帰って来た」、7 月の 3 号に山田清三郎の「支那の二作家を訪ねて」および藤枝丈夫「中国の新興文芸運動」、11 月の 7 号に支健二「上海印象記」である。王独清は 1926 年初めにフランスから帰国した。山田清三郎の「支那の二作家」は、郭沫若と成仿吾であり、藤枝丈夫は、この時の談話をまとめたものである。支健二の「上海印象記」は「暗黒に包まれた上海の動静と、創造社の李初梨、王独清、馮乃超、鄭伯奇らプロレタリア文学者たちとの文芸運動に関する対談を伝える」ものであつた。『国際文化』は、尾崎が上海に渡った 1928 年 11 月に創刊された。創刊号では「世界左翼新聞雑誌の研究」に藤枝丈夫が「中国における左翼出版物」を書き、『創造月刊』『太陽月刊』その他の雑誌を紹介している（丸山 1983 : 59-60）。

丸山昇の時代区分によると、創造社は、第一期が 1920 年代初頭に、日本留学中の郭沫若、郁達夫、成仿吾らによって組織されたが、ロマンチックな初期の主張が行きづまり、一旦 1924 年半ばに活動を停止している。第二期は、五・三〇事件を背景に若いグループが『洪水』を復刊し、ついで創刊された『創造月刊』等で郭沫若を先頭に「革命文学」への傾斜

を強め、実際行動の面でメンバーが広州に移り国民革命に直接参加した時期である。第三期は四・一二クーデターの後、上海にもどって来た旧同人たちに日本留学から帰国した影康、馬乃超、朱鏡我、李初梨が参加して『文化批判』を創刊し、『創造月刊』も内容を刷新してプロレタリアートの階級意識を内容とする『革命文学』を提唱し、魯迅、茅盾等を批判し、彼らの反論を受けて「革命文学論戦」を展開した。しかし、尾崎と創造社のメンバーとの交際は、1929年から途絶えた（丸山 1983：59-75）。

尾崎にとって、上海に開校していた東亜同文書院の人脈が、左翼運動家と面識を持つ重要な場所だった。東亜同文書院は、1900年に開設された南京同文書院に始まり、学生が毎年卒業前年の夏に中国政府の許可書を受けて中国各地に調査旅行を行い、その調査誌を卒業論文として提出させて、中国専門家、及び実務家を養成していた。学生の報告書は、後に『支那経済全書』『支那省別全誌』となって集大成された（大学史編纂委員会編 1982：69-73）。これらは、戦前の中国各地の情勢を網羅する百科全書である。東亜同文書院の卒業生は、外務省や南満州鉄道株式会社などに就職するものが多かった。

東亜同文書院は、中国政府に公認された学校であったが、日本ではなく上海に設置された学校であったので、日本国内のような左翼思想や反戦活動を治安維持法で公的に取り締まる手段がなかった。そこで、日本国内では活動が許されない左翼運動が可能だったので、文芸部委員の左翼学生が、学校の許可を得て文芸部の機関誌「図南学報」の発行を計画し、尾崎は彼らの指導を引受けた。学生たちは共産主義の研究会を持つことになり、尾崎が中心となってブハーリンの「史的唯物論」をテキストに研究会を開いた。当時の学生は、加藤宋太郎、安斉庫治、中西功、水野成、白井幸行だった。研究会自体は、尾崎が病気になる、治療のため東京に帰国したので中止されたが、加藤等は中国の共産青年同盟運動に参加したことが学校に分かり、中途退学に処せられた（石堂編 1962b：205）。

尾崎は、東亜同文書院左翼学生を通じて楊柳青と知り合った。彼は姜とも陳伍とも言ったが、中国共産党の江蘇省委員か上海地区委員をしていた人物で、尾崎は左翼の立場から情報交換をした。1931年の春に、楊柳青から頼まれて「飛行集会」を手助けしたことがあった。「飛行集会」とは公園のような場所で風のように集り、極めて短時間に協議をして、風のように解散する会議のやりかたで、その見張りを依頼されたことがあった。尾崎は、楊柳青の紹介で、王学文とも面識を得た。彼は京都帝国大学を卒業し、左翼作家連盟に加入し、かつ中国社会科学者連盟を組織していた。

尾崎の上海での活動は、基本的に新聞記者としての取材、及び社会主義活動としてゾルゲへの情報提供以外は、東亜同文書院左翼学生を通じた中国共産党との部分的な接触にとどまっている。尾崎がゾルゲと知り合って、日本の満州進出であるとか、軍部の動きに関する情報は、日本の極秘情報ではなく、通常のマスコミ報道を、独自の視点で分析した見解に過ぎない。

ゾルゲが、日本の機密情報を収集する諜報機関を作り出したのは、1933年9月に東京へ赴任し、尾崎と接触してからである。ゾルゲは、上海での経験により尾崎の日本の政治・

軍事、対中政策などの分析を通じて、より深い事件の背景の考察が可能となったことが、東京赴任の契機ともなっている。さらにゾルゲは、ドイツ大使館付の駐在武官オットーの私設秘書として、ナチス・ドイツと日本の関係や、日本の情勢分析を助言し、その功績でオットーは大使にまで昇進したので、ドイツ大使館経由で、日本軍部の動きをつかむことができるようになった。さらに尾崎は卓越した評論で、中国問題の専門家となっていくた。特に尾崎は、ジャーナリストとしても、中国問題の専門家としても高い評価を得ており、1936年の西安事件が蒋介石の容共策と、無事の帰還を予想し、その通りに事件が収拾したことは前述した。尾崎の予測は、中国の抗日統一戦線の方性を決めたコミンテルンの決定を、ゾルゲ経由で事前に知っていたので、そうした予測ができたのであった。つまり、上海での仕事を通じて、ゾルゲと尾崎はつながりを深め、その相互依存関係で、ふたりは東京で、日本の国家機密に関する部門にまで情報源をもつことが可能になったのであった。

では最後に、上海の国際情報機関が、戦後も残った可能性があるのかという点を考えてみたい。赤軍の中国派遣団以外に、1930年代の上海で重視されたのは、コミンテルンの極東部で、上海の国際租界とフランス租界の警察が主要な捜査目標にしていた。上海の極東部の存在は、1931年4月にサイゴンのフランス刑事局が、何人かのインドシナ共産党員を逮捕したときにもらされた。1931年6月1日、シンガポールのイギリス警察がマレー共産党とひそかに交渉のあるフランス人のコミンテルン機関員を逮捕し、彼の文書から上海へ電報のあて先と私書箱番号ができていた。それをたどると、イレヌ・ヌーランという人物が浮かび、1931年6月15日に逮捕された。彼のアパートからコミンテルン極東部の1年の会計簿が見つかり、組織の詳細が明らかになった。コミンテルン東方部は、1924年コミンテルン第5大会で、地域別書記局として設定され、宣伝部を含む独自組織で、中央執行部に責任を持つことになっていたが、組織は近東・中東・極東に分かれていた。1930年に極東の本部を上海に移していた（ディーキン・ストーリィ 2003：137-138）。

ゾルゲは、上海に極東部の組織が複数あり、お互いに連絡を取らずに活動していたといっている。裁判に提出したゾルゲの手記によると、当時の上海は、中国共産党、およびコミンテルンから派遣されてきた極東部の組織があったのだが、彼は極力、これらの組織と接触しないように配慮したと書いている。それは、お互いの関係が密になりすぎると、一部の組織が露見するだけで、組織全体が壊滅するからである（ディーキン・ストーリィ 2003：148）。

ゾルゲの上海での任務が、南京政府、つまり国民党の政策や、日本の満州侵略など、中国共産党と接触を持たない組織であったことは、彼の調査項目からもわかる。ゾルゲの裁判記録には、きわめて限定的ではあるが、中国人の情報提供者が出てくる。しかし、その供述は曖昧で、日本の検察も、ゾルゲの上海での活動に関しては、日本の機密を漏洩したことに関係しないため、それほど厳しく追及していない。その観点でゾルゲの手記を見ると、日本の検察の追求から上海の組織をうまく隠すことができたといえる。

堀江邑一は、中国研究者として尾崎とつながりがあった。堀江は、当時、高松高商に勤

務しており、1933年3月末からの上海留学を許可された。尾崎が上海から帰国し、ゾルゲも日本に赴任するので、上海での尾崎の仕事を引き継ぐことになった。ゾルゲの後任者も上海に赴任しており、アグネス・スメドレーの仲介で、ゾルゲの後任者Sに紹介され、一週間に1、2度レストランであって日本やアジアの情勢について聞かれたり、日本や中国の新聞に出た重要と思われる記事をドイツ語に翻訳して渡したりしていた。しかし堀江は、上海に渡って半年もしないうちに高松高商の左翼学生事件に巻き込まれ、8月はじめには香川県警の特高に検挙され、日本へ連れ戻されたので、尾崎の後任者としての仕事は中断してしまった（堀江 1978：4-5）。堀江の回想では、ゾルゲの後任者の話がわずかに言及されているだけだが、尾崎の逮捕理由が、日本国内での嫌疑によるため、上海での活動は取り調べの対象になっていなかった。そこで尾崎とゾルゲの交流に始まるコミンテルンと日本人協力者との接点は途切れてしまった。

上海のコミンテルン組織の関連で、ゾルゲ事件に深い関心を寄せたアメリカ人がいる。それは、戦後、占領期の日本に駐留した参謀第二部のチャールズ・ウイロビー少将である。ウイロビーについて、春名幹男は、アメリカ中央情報局（CIA）の対日工作に関連して、興味深い指摘をしている。日本占領軍の総指揮官であったダグラス・マッカーサー元帥や参謀第二部のチャールズ・ウイロビー少将は有名なCIA嫌いで、GHQ管轄領域内でCIAの活動を認めなかった。しかし実際は、戦後になって占領下の日本にCIA要員が100人から200人あまりが駐在した。これについて、CIA本部の初代日本課長、カートン・スウィフトは「ウイロビーは、上海市警察記録文書のコピーをCIAからもらい、それと引き換えに、CIA上海支局の横須賀移駐を認めた」と証言している（春名 2000：212-214）。

上海市警察記録は、AとBの二つの資料からなり、Aは上海市警察捜査記録で、Bはその関連資料で、その中に「上海におけるスパイ活動に関する秘密記録1926-1948」が含まれており、これは別称「ウイロビー・コレクション」と記されている。ウイロビーは、この資料を1951年にアメリカ上院司法委員会へ提出している。また、彼はこの資料を利用して、『上海の陰謀（Shanghai Conspiracy）』という本を書いており、アメリカ人女性ジャーナリストのアグネス・スメドレーとゾルゲの関係を厳しく追及している（ウイロビー 1953：41-42）。

当時、1949年の中華人民共和国の建国、ソ連の核実験成功などを共産主義の脅威と受け取り、アメリカでは1950年2月に始まる「反共ヒステリー」とも言及されるマッカーシズム（McCarthyism）の影響で、共産主義者追放を大義名分にアメリカ陸軍、マスコミ関係者、映画関係者、学者を追及する大規模な反共運動があった（ロービア 1984）。晩年のアグネス・スメドレーは、「ソビエト政府のスパイそして手先」としてマスコミで告発された。1949年2月10日に、アメリカ陸軍省の「極東における国際スパイ事件に関するアメリカ極東軍総司令部報告（コーネル報告）」の中で、ゾルゲや尾崎秀実とともに、スメドレーとガンサー・スタインの名前を公表した（高杉 1988：281）。ウイロビーは、この報告書で、スメドレーがゾルゲ情報網の結節点であることを告発した。しかしその根

拠は状況証拠に過ぎず、スメドレーが名誉毀損で訴える構えを見せると、アメリカ陸軍はこの告発を撤回し謝罪した。スメドレーは、それにもかかわらずアメリカを去り、1950年に中国へ戻る途中、病に倒れて生涯を終えた（マッキンソン・マッキンソン 1993：390-391、クレア・ヘイズ・ファイルソフ 2000：105）。

スメドレーは、アメリカ生まれだが、正規の教育を受けず、働きながら勉強をしてジャーナリストになり、1928年からドイツの新聞社の中国特派員となった。彼女は共産主義に共感を持ち、1927年から31年まで中国紅軍の組織と発展を取材して『中国紅軍は進撃する（China's Red Army Marches）』を発表し、その後、『中国は抵抗する』、『中国の歌ごえ』、朱徳の伝記である『偉大なる道』を発表している。ゾルゲや尾崎と交流があった時期は、中国紅軍の取材時期と重なる。石垣綾子は、スメドレーと個人的な交流を元にした回想録で、スメドレーと尾崎秀実の特別な関係を赤裸々書いているが（石垣 1967：168-179）、スメドレーの著作には、この二人のことをまったく伏せている。当然、彼女とコミンテルンとの関係も、彼女の著作の中では言及されていない。

スメドレーとコミンテルンとの関係は、近年出版された資料で明らかにされた。これによると、彼女が1935年に上海で反帝国主義の英字紙を出版するため、コミンテルンに資金援助を申し入れていた。その後、スメドレーは『中国の声 Voice of China』紙を創刊した。この編集部の仕事をアメリカ共産党から委託されたのであるという（渡部 2003：37、クレア・ヘイズ・ファイルソフ 2000：105-106）。しかし、その後、コミンテルンは、彼女の行動が「狂気じみた資金要求」や「彼女の活動の無謀な傾向」のために、「破壊的傾向」を帯びたため、組織と彼女との直接的な接触を断つように指令を出した（クレア・ヘイズ・ファイルソフ 2000：113-116）。スメドレーは、ゾルゲと尾崎を引き合わせ、また尾崎が帰国後も、その後任者である堀江邑一を、ゾルゲの後任者と引き合わせるなど、スメドレーは上海でのコミンテルン活動家の仲介者として重要な役割を演じている。彼女は、コミンテルンから財政的援助を受けていたのであろうが、かならずしもその構成員と判断することはできないのではないだろうか。

コミンテルンは、世界の共産主義革命路線が実現不可能となったあと、ソビエトの防衛のための国際戦略に貢献するように方針を転換している。そこでコミンテルンの極東部は、ソビエトへの忠誠が最も重要であった。ゾルゲの上海機関が、そうした性格のものであったので、戦後もコミンテルン極東部の末端情報網として、上海でソビエトのための情報収集と通報をしていたことは、十分考えられる。しかし、こうした活動の確実な証拠は、諜報組織という性格上、これからも公表されることはないであろう。

5 結論

カリフォルニア大学のチャルマーズ・ジョンソンは、アジアの近代史・共産主義・民族主義を学問的に研究する立場から「ゾルゲ事件には、スパイ事件以上のものがある」と結

論付けた（ジョンソン 1966：1）。この言葉は、ゾルゲ事件の研究で、繰り返し引用されるのであるが、ゾルゲおよび尾崎秀実の活動と知的背景を追えば、アジアの知識人象として、20世紀前半の国際環境を端的に反映したといえる。

石堂清倫は、ゾルゲ事件研究の方法について、ゾルゲは4ヶ国語を操り自ら手記も書いたが、警察・検察の供述調書や裁判記録を事実だと思っていると、権力・特高警察の思うつぼにはまり、歴史の「真実」を見分けることにはならないと指摘している。その例として、ゾルゲは「統制派」に属する革新将校と親しかつたにもかかわらず、ゾルゲ事件では、軍関係者はほとんど取り調べを受けておらず、さらに皇室関係も、ゾルゲ事件の捜査対象からはずされていることを挙げている（加藤 2005）。供述調書や裁判記録は、網羅的に『現代史資料』4冊で公表されている（石堂編 1962a、1962b、1963c、1971）。ゾルゲがソ連へ送った報告書は、近年ロシアで徐々に発掘されている（白井・小林編 2000、白井編 2003）。既存の資料は、ゾルゲのモスクワに送った報告書と総合することによって、初めてコミンテルンの諜報網の全体像がわかるであろう。

さらに石堂は、ゾルゲの研究能力について、重要な指摘をしている。それは、従来のゾルゲの伝記で見落としている重要な経歴として、1923年にフランクフルトの社会研究所の活動家であったことである。マルクス主義のひとつの流派としてフランクフルト学派があり、カール・コルシュ、ジェルジ・ルカーチ、ウィットフォークなどが入っている。石堂は、フランクフルト学派が観念的となったため、ソ連系のマルクス主義者はあまり高く評価していないけれど、これは西洋型マルクス主義として無視できない存在だと指摘している。（石堂 1987：131-132）

多くのフランクフルト学派の学者は、ナチス党が政権を掌握した後に、反ナチ勢力として国外退去の処分を受け、アメリカへ亡命した。彼らは亡命先のアメリカで、ドイツの国内事情に精通したナチスに反対する知識人として対ドイツ戦略の情報戦に協力した。アメリカは、第二次世界大戦が始まるまで、統一された情報機関を持たなかったもので、第二次世界大戦が始まり、イギリスの情報機関をモデルに、戦略的な情報部門を設けた。それが中央情報組織 OSS（Office of Strategic Services）である。その中に、敵対する国や戦闘が展開している地域情勢の研究分析部門（Research & Analysis Branch、略して R&A）があった。そこで働いていたドイツ人研究者の多くは、自由主義思想を持った「フランクフルト学派」の研究者だった。

例えばノイマンは、1940年代初めに『ビヒモス：ナチズムの構造と実際』を刊行して、アメリカの対ナチ政策に多大な影響を与えた。ノイマンは、この著作の中でナチズムの本質を政治、軍事、経済、社会・文化のあらゆる側面が総合された超近代的かつ特異な独裁体制であると分析し、この体制と対するにはそれにふさわしい「画期的なアプローチ」が必要であると力説していた。ハージョ・ホルボーン（Hajo Holborn）も、協力を申し出ていた。彼は、左派的な思想からだけでなく、学問的普遍性を持った反ナチの姿勢を持っていた。さらに重要なのは、戦後のアメリカのリベラリストとしてベトナム反戦運動など

の哲学的基礎を築いたマルクーゼも、「フランクフルト学派」に属した OSS の若い研究者をまとめる中心人物として活躍していたのである (Katz 1989)⁶。

現状を「科学的に」分析する学問が、マルクス主義の潮流から生まれ、20 世紀に諜報部門として、ソ連とアメリカに誕生したことは、マルクス主義が生み出した「社会科学」の宿命であるのかもしれない。外国の租界のはざまに生まれた 1920 年代から 30 年代の「魔都上海」は、アジアにおける共産主義運動の拠点であった。ゾルゲ事件から見える「スパイ事件以上」のものは、中国・日本を舞台とした、近代アジアの知識人が、戦争に抵抗しようとして呻吟する姿である。20 世紀の前半は革命と戦争の時代であった。ゾルゲが尾崎と出会った上海は、マルクス主義、反戦活動、共産主義運動、国際主義なども含めた混沌とした世界であった。だからこそ、彼らが「魔都上海」で邂逅したのは偶然でない。東洋と西洋の結節点であった上海という都市の国際性が、当時の革新思想に基づく社会活動家たちにとって重要な磁場であったことを、ゾルゲ事件は物語っている。

追記

本稿を脱稿したのち、楊国光『ゾルゲ、上海ニ潜入ス：日本の大陸侵略と国際情報戦』東京：社会評論社、2009 年 11 月を入手した。この本は、同著者により中国語で出版した『諜海の巨星ゾルゲ』2002 年、『リヒャルト・ゾルゲ：ある秘密諜報員の功績と悲劇』2005 年を、著者自身が日本語に訳出した上で、新たに書き足している。本稿と同じ研究テーマの書籍であり、依拠した資料は日本語・日本語に翻訳されている英語、ロシア語の研究書、及び中国語とロシア語の公文書など一次資料を駆使した研究である。本書は、ゾルゲと周恩来の関係など、ゾルゲの上海における諜報活動について日本ではほとんど言及されていない部分を詳細に分析している。本稿は、日本語の資料に依拠していたので、ゾルゲの上海での情報網は不明だった。本稿は、その意味で日本語資料に依拠したゾルゲ研究の限界を示している。本書を参考に、このテーマでの更に発展させることを、今後の課題にしたいと思う。

注

- 1 2003 年に東宝から配給された映画の「スパイ・ゾルゲ」は、篠田正浩監督・原作・脚本。フランスの映画監督イブ・シャンプの映画「ゾルゲ博士、あなたは誰か？」(日本名では「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」(1961 年、松竹、日本/フランス合作)。小説では、モルガン・スボルテス『ゾルゲ：破滅のフーガ』がある (モルガン 2005)。この小説は 2002 年にフランスで出版されたが、その年の「高校生が選ぶ」ゴンクール賞では一票差で次点となり、同年本物のゴンクール賞で受賞を逸したものの、選考委員に変装した 1 人の男が、正式発表前に偽の記者会見で受賞を発表する椿事もあって、話題になった本である。
- 2 「リヒャルト・ゾルゲ略年譜」(ゾルゲ 1994：377-383、法政大学大原社会問題研究所

- 編 1965:4 章)。この他、ゾルゲ事件 (<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/senji2/rnsenji2-166.html> ウェブ版、2005 年 10 月 12 日アクセス) にも、ゾルゲ事件の概要が記されている。また寺田弘壬の「ゾルゲの年表」もある(寺谷 1979:74-76)。ゾルゲの経歴に関しては、これらの研究書で不一致が見られる。しかし、ゾルゲ著『二つの危機と政治』が最終的なものと判断して、主としてこの記述に従うことにした。
- 3 この集会は、後に「フランクフルト学派」と呼ばれる知識人グループとなり、社会研究所(1923 年設立)につながる最初の集まりであった。このときに、日本から福本和夫が参加し、重要な役割を果たした。福本の著作で発表されたこのときの記念写真には、リヒャルト・ゾルゲの他に、カール・アウグスト・ヴィットフォーゲル、ルカーチ・ジョルジ、カール・コッシュが映っている(福本 2004)。
 - 4 石堂は、中国がこうした事情を一切黙殺しており、公表していないと指摘している。さらに石堂は、中国ではゾルゲ、尾崎が禁句になっており、コミンテルンやソ連系の活動家のことを口に出したくないのだろうと指摘している(石堂 1987:138)。中国では、ゾルゲ事件について、前述した 2003 年に作成された篠田正浩監督「スパイ・ゾルゲ」が中国でも公開されたことによって知られるようになった。
 - 5 尾崎が予審調書で語った朝日通信部近くの創造社は、創造社出版部のこと。出版部小売部の二階に「上海珈琲店」もでき、文芸界の連絡・談話の場所となった。尾崎は上海で、最初に昆山路義豊里の中古洋服店の二階に住み、1929 年の春に施高塔路・花園アパートに引っ越している。創造社出版部は麦拿里で、歩いて 10 分の距離である(丸山 1983:60)。
 - 6 この他に、次のサイトを参照した。http://blog.livedoor.jp/strategy001/archives/cat_13529.html 「中西輝政非公認ファインサイト」2005 年 1 月 28 日アクセス。

参考文献

アグネス・スメドレー著、高杉一郎訳

1972 『中国の歌ごえ』 東京：みすず書房 (Smedley, Agnes, *Battle hymn of China*, New York : Alfred A. Knopf, 1943)

H・クレア、J・E・ヘイズ、F・I・ファイルソフ著、渡辺雅男、岡本和彦訳

2000 『アメリカ共産党とコミンテルン』 五月書房 (Harvey Klehr, John Earl Haynes, and Fridrikh Igorevich Firsov, *The Secret World of American Communism*, New Haven : Yale University Press, 1995)

F・W・狄金、G・R・斯多利著、聶崇厚訳

1983 『佐爾格案件』 北京：群衆出版社

大学史編纂委員会編

1982 『東亜同文書院大学史—創立 80 周年記念誌』 東京：滬友会

ディーキン、F. W.・ストーリィ、G. R、川合秀和訳

2003 『ゾルゲ追跡』(上) 東京：岩波書店、(F.W.Deakin & G.R.Storry, *The Case of Richard Sorge*, Chatto and Windus Ltd., 1957)

後藤田正晴

1998 『情と理 後藤田正晴回顧録』 上、東京：講談社

福本和夫

2004 『革命運動裸像：非合法時代の思い出』 東京：こぶし書房

春名幹男

2000 『秘密のファイル CIA 対日工作』(上) 東京：共同通信社

堀江邑一

1978 「尾崎秀実と私」『尾崎秀実著作集』第 4 巻月報 4 東京：勁草書房

法政大学大原社会問題研究所編

- 1965『日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動』東京：労働旬報社
- 石堂清倫
- 1987『異端の視点：変革と人間と』東京：勁草書房
- 石堂清倫編
- 1962a『現代史資料1 ゾルゲ事件資料1』東京：みすず書房
- 1962b『現代史資料2 ゾルゲ事件資料2』東京：みすず書房
- 1962c『現代史資料2 ゾルゲ事件資料3』東京：みすず書房
- 1971『現代史資料2 ゾルゲ事件資料4』東京：みすず書房
- 石垣綾子
- 1967『回想のスメドレー』東京：みすず書房
- ジョンソン、C 著、萩原実訳
- 1966『尾崎・ゾルゲ事件』東京：弘文堂 (Johnson, Chalmers, *An Instance of Treason : Ozaki Hotsumi and the Sorge Spy Ring*, Stanford, Calif. :Stanford University Press,1964
- Katz, Barry M.
- 1989, *Foreign Intelligence: Research and Analysis in the OSS*, Harvard University Press
- 加藤哲郎
- 2005『講演録 イラク戦争から見たゾルゲ事件』日露歴史研究センター主催・ゾルゲ・尾崎秀実 処刑60周年記念11/6講演会講演記録集『現代の情報戦とゾルゲ事件』東京：日露歴史研究センター
- 風間道太郎
- 1976『尾崎秀実伝』東京：法政大学出版会
- マードー・Y 著、植田敏郎訳
- 1999『ゾルゲ事件の真相』東京：朝日ソラマ刊
- ジャニス・R・マッキンソン、ステイヴン・R・マッキンソン
- 1993『アグネス・スメドレー：炎の生涯』東京：筑摩書房 (Janice R. MacKinnon & Atephen R. MacKinnon, *Agnes Smedley : The Life and Times of an American Radical*, The Regents of the University California, 1989)
- 丸山昇
- 1983「上海における尾崎秀実の周辺：補遺的覚え書」今井清一・藤井昇三編『尾崎秀実の中国研究』東京：アジア経済研究所
- モルガン・スボルテス著、吉田恒雄訳
- 2005『ゾルゲ：破滅のフーガ』東京：岩波書店 (Sportes, Morgan , *L'insensé ; Sorge*, Paris, Grasset & Fasquelle,2002)
- ノイマン・F 著、岡本友孝・小野英祐・加藤栄一訳
- 1963『ビヒモス・ナチズムの構造と実際』みすず書房 (Franz Neumann, Behemoth : The Structure and Practice of National Socialism, Oxford University Press, 1942)
- ロービア、R.H. 著、宮地健次郎訳
- 1984『マッカーシズム』東京：岩波書店 (Richard H. Rovere, *Senator Joe McCarthy*, Harcourt Brace Jovanovich, 1959)
- 白井久也編著
- 2003『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』東京：社会評論社
- 2007『【米国公文書】ゾルゲ事件資料集』東京：社会評論社
- 白井久也・小林峻一編著
- 2000『ゾルゲはなぜ死刑にされたのか：「国際スパイ事件」の深層』東京：社会評論社
- 高杉一郎
- 1988『大地の娘』東京：岩波書店
- 寺谷弘壬
- 1979「ゾルゲの年表」勝部真長・寺谷弘壬「ゾルゲ事件」『現代のエスプリ』140号
- リヒャルト・ゾルゲ著、勝部元・北村喜義・石堂清倫訳

- 1994 『二つの危機と政治：1930年代の日本と20年代のドイツ』 東京：御茶ノ水書房、
ウイロビー、C・A 著、福田太郎訳
- 1953 『赤色スパイ団の全貌：ゾルゲ事件』 東京：東西南北社 (Charles A. Willoughby, *Shanghai Conspiracy: The Sorge Spy Ring, Moscow, Shanghai, Tokyo, San Francisco, New York, Boston, Western Islands*, 1952)
- 尤里・科羅利科夫著、永穆・愛琦・李薇訳
- 1980 『間諜—左爾格』 北京：新華出版社
- 渡部富哉
- 2003 「尾崎秀実を軸としたゾルゲ事件と中共諜報団事件」 白井久也編著 『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』 東京：社会評論社